

## リレー随筆

## アナザースカイ！奄美大島！

鹿児島県立大島病院 救命救急センター 山端 裕貴

「ここがぼくのー！アナザースカイ！！  
あまみおおしまー！！！」

この1年半、何度こうやって叫びながら、透き通る奄美の海に飛び込んだだろうか。時には船の上から、時には岩場から、時には砂浜から。奄美大島に来て、人生観がまるで変わった。周りの人にも「別人みたい」と言われるし、自分でもそう感じるときがある。奄美大島でのさまざまな出会いは、私にとってかけがえのないものばかりだ。

私は、生まれも育ちも青森県で、大学時代も初期研修も青森県で過ごした。私は2018年に青森県の太平洋側に位置する八戸市の八戸市立市民病院救命救急センターで救急科後期研修を始めた。3年間の後期研修期間中に、他施設での研修を選択できる。鹿児島県立大島病院（以下、県病院）の救命救急センターもその一つだ。

私は虫がとても苦手だ。特にハネがあって、自由自在に飛び回る虫は、本当にダメだ。催眠術をかけてもらい虫嫌いを克服できるなら、お金を払ってもよいと心の底から思っているくらいだ。恥ずかしながら、奄美大島に来る半年ほど前まで、奄美大島がどこにあるのか全く知らなかった。「中国・四国地方より南のどこかの島なんだろうなあ、虫がいそうだなあ」という印象だった。そして、奄美大島が鹿児島県本土と沖縄県の間にあることを知り、予想以上に南に位置していたので、虫が活動的になるであろう7月から9月の3ヶ月間の研修が決まったときは、本当に直前まで研修先を変えようかと考えたこともあった。あの時の自分に言いたい、「なにがなんでも奄



美大島に行きなさい、虫が出ても自分は死にやしないよ」と。

そして、後期研修3年目（卒後5年目）、コロナ第2波が始まってまもなくの2020年7月に奄美大島に初めてやってきた。羽田空港からスカイマークの飛行機で奄美に来た。天気はどんよりとした曇り空、そして青森県より圧倒的に蒸し暑かった。上司が県病院まで送迎をしてくれた。名瀬市内までの車中で、アダンの実のなる木を見ながら、「これが南国かあ」とちょっぴりワクワクしたことを覚えている。初来島者にとって定番の“ひさ倉”で鶏飯を初めて食べた。このときはまだ「トリメシ」と読んでいた。和光トンネルではなく、名瀬市街地を経由して県病院まで向かったが、思っていた以上に建物が立っていたので、ほつとした。

県病院に到着して、さっそく3ヶ月間の住処となる、救命救急センター5階の部屋に行き、荷解きをした。きれいな部屋だった、広さに関しては特に気にならなかった。5階という高さに位置しており、おそらく虫の心配

は要らないだろうと思った。部屋にも院内放送はかかる、1階に降りたらそこはもう救命救急センターである。文字通りの「レジデント」生活が始まったのだ。

基本的に病院の中にいれば、虫の脅威にさらされることはない、とその時は勘違いしていたのだが、特に用事がなければ、食料の買い出し以外は外出するつもりはなかった。重症や急変等で人手が必要な時は、院内に住んでいるし、毎回呼んでもらおうと思っていた。

来島して3日目に、歓迎会を兼ねた飲み会があった（このときの奄美は、コロナは別世界のことのようだった）。網戸もなしに全開放されている居酒屋の窓を見て、驚愕した。何が外から入ってくるかわからない。その窓が常に視界に入る位置に座った。東北生まれ東北育ちなので、日本酒を飲むことがほとんどだった。焼酎は大学時代に「黒霧島」をたまにお店で飲んだだけだった。この店で、奄美の黒糖焼酎の美味しさを知り、それから焼酎にハマっていった。お気に入りはJOUNGOの水割りだ。タナガの唐揚げとトビンニヤ、夜光貝のバター焼きは最高のおつまみだ。青森にも持って帰りたい。

救命救急センターの主な業務は、ER (MC含む) とドクターヘリである。コロナ患者はほとんどいなかつたが、患者数がやや減少傾向だった。ERでは初期研修医たちとしっかりディスカッションしながら診療を行くくらいの時間的余裕があることがほとんどだった。八戸では、重症や急変患者の波に溺れて、なかなか研修医とのディスカッションができなかつたり、伝えたいことも伝えられなかつたり、お互いに“消化不良”になることが多かつた。奄美大島の研修医たちは、素直で貪欲で真面目（？）な人たちばかりだった。患者がない時などには、奄美大島のことを教えてもらった。せっかく奄美大島に来たのだから、海に入らないともつたないと勧められた。教えてもらったマリンショップに平日一人で

行き、体験シュノーケリングをした。自分は水に腹臥位で浮かぶことはできるが、息継ぎができないので、実質カナヅチだった。ウェットスーツは着ているので基本的に溺れることはないのだが、ガイドさんの引っ張るビート板にしがみついたまま、決して離さなかつた（離せなかつた）。しかし、その体験シュノーケリングで、山端の世界感がガラッと変わつた。月並みな表現だが、これまで約30年間生きてきて、本当にこんなきれいな景色を見たことがなかつた。テレビや写真でたまに見る海の景色を意識的に見たことがなかつた。だから、色鮮やかな魚やサンゴ、遠くまで透き通る青い海、何もかもが衝撃的だった。あつという間に時間が過ぎた。「絶対また海に行く、またシュノーケリングをするぞ！」そう思った。ちなみに、南国奄美大島の太陽光の恐ろしさを知らなかつたため、日焼け止めは塗つておらず、その後2-3日は首の日焼けに悩まされた。

その後は、積極的に奄美大島を満喫しようとを考えるようになった。モーターパラグライダーで奄美大島を空から堪能し、救急科をローテーションしていた研修医と一緒にマングローブのカヌーにも乗つた。夜にアマミノクロウサギを見に行くためにドライブをしたり、職場のハブ取り名人と一緒にハブ取りに行つたりもした。ハブは見つけられなかつたが、アカマタとヒヤンは見つけられた。ハブ取りはもちろん夜間だったので、養蜂場で使う白い防護服を楽天で安く購入して、虫との接触を最大限回避するようにして臨んだ。後に知ることになるが、白や黄といった明るい色は、逆に虫を寄せ付けるらしい。無知は恐ろしい。

そして、大島海峡での海遊び、これが人生を変えた出来事の一つといつても過言ではない。数名の研修医たちと、小型船を一日貸し切つて、シュノーケリングやウォーターマット、ウェイクボード、SUPなどで遊びまくるツアーに行った。昼休みに約3-4mの高さの

船の上から、底が見えるほど透き通った青い海に飛び込みジャンプ！みんな各自に叫んだり、ネタをしたりしながら飛び込んでいった。自分の番になったとき、高いという恐怖は少しあったが、それよりもワクワク感が上回っていた。そこでとっさに出てきた、「ここがぼくのー！アナザースカイ！！あまみおおしまー！！！」、この言葉が誕生した瞬間だった。今思うと、高校よりも大学よりも「THE青春」な時間だった。

奄美の海、自然に魅せられ、人生観が大きく変わったのだが、実はもう一つ大きく変わった出来事があった。ある日の救急外来で、一人の研修医が見慣れないゴツい靴を履いていた。それはおろしたての新しい登山靴で、数日後に屋久島登山に行くため、その靴慣らしだ、と言うのだ。虫嫌いの私にとっては、虫しかいない山にわざわざ行くなんて理解できなかった。ただ、その研修医は、生き生きと山の美しさを語り、職場で靴慣らしをするほど山登りを楽しみにしていた。私は、山ってそんなに良いものなのか、と半信半疑で聞いていた。しかし、泳げなかった私が海に魅せられた経験がすでにあった。食わず嫌いはもったいないかもしれないと思った。八戸に戻ったら山登りが好きな研修医が一人いたはずだから、虫が少なくなった秋頃に連れて行ってもらうか、と考えた。八戸に戻ってから、さっそく山登り好きの研修医に話をしたところ、アウトドアショップに連れて行かれ、山登りの三種の神器のうちの2つ、登山靴とレインウェアを買った。某有名アウトドアブランドの商品だったので、少し値は張ったが、せっかくだしちゃんとしたのを買おう、食わず嫌いは良くない、と自分に言い聞かせた。その週末、さっそく山登りに行った、行き先は秋の紅葉シーズン真っ只中の八甲田山だ。登山口に着いて、これまでの山登りをしてこなった人生を後悔した。吸い込まれるような赤と黄の世界が広がっていた。頂上はガスってい

たため頂上からの景色は満喫できなかったが、その後に山小屋で食べたカップラーメンの味と、下山後の温泉（日本三大秘湯の谷地温泉）の気持ちよさは一生忘れられない。奄美の研修医が新しい登山靴を履いてきてなかつたら、それに自分が気付かなったから、奄美の海の良さを知らずに食わず嫌いのままだったら、間違いなくそれからの山との出会いはなかつた。その後、山好きの彼女もてきて（今は別れてしまったが）、もしその彼女と結婚していたら、その研修医が履いていた登山靴は“山端家の家宝”になっていたんだろう。

ここまで虫についての話がちょこちょこ出ていたが、ただ逃げ回っていただけではない。研修医の提案で、「暴露療法」を行うことにしたのだ。その方法は、屋仁川で飲んだ後に、県病院まで20分ほどかけて徒步で帰ってくることだ。奄美の7月～9月は、ものすごかった。ここでは詳細は避けるが、この「暴露療法」、個人的には一時的には効果があったと思う（他の人はそう思っていないかったかもしれない）。とりあえず、“見る”ことには慣れた。研修医たちは研修医寮へ、私は県病院へ、と分かれる路地がある。通称「ゴキロード」、そこで飲みに行った研修医たちと別れを告げて、県病院までの約50mのその道を私は毎回ダッシュした。酔い醒ましにはちょうど良かつた。いつも付き合ってくれた研修医たちには感謝しかない。

奄美で過ごす最後の夜は、研修医たちが送別会を開いてくれた。3ヶ月間に行った屋仁川で私が好きだったいくつかのお店の食べ物をテイクアウトして、宅飲みで屋仁川パーティをした。最高の夜だった。これも一生忘れられない時間だ。

2020年の7月から9月までの3ヶ月間は、これまでにないくらいの濃密な3ヶ月間だった。後にも先にも、こんな3ヶ月間はきっともうないだろう。

奄美から八戸に戻り、本格的に山登りを始

めた。すぐに雪山シーズンになったので、雪山登山を始めた。いろいろな登山講習会で、初心者がいきなり雪山を始めたことに驚かれた。後に知ることになったが、登山を始めるきっかけになった奄美の山好き研修医も、雪山は危険だからとやったことがなかったそうだ。奄美に来てみてから、興味を持ったことには可能な限り何でもチャレンジしてみようと思うようになった。その後、山にはどっぷりとハマった。大好きなディズニー映画『アナと雪の女王』でエルサがあの名曲“Let it go”を歌うシーンで、歌い踊るエルサではなく、遠くにそびえ立つ山々の方を見つめていることにふと気がついたとき、「自分が変わってしまった」と自覚した。もともとインドア派だった。インドアは基本的に命の危険に晒されることは少ないとと思っている。奄美でサーフィンをやっているときに、波に飲まれそうになったことがあった。「ヤバい！」と思ったが、変な話そのスリル体験が、海や山などの自然に私が惹きつけられた要因の一つでもあるような気がする。

その後、紆余曲折あり、2021年4月から1年間、今度は研修ではなく、県病院救命救急センターのスタッフとして働くことにした。この1年間で、JAL修行を終わらせてJGCプレミアカードを手に入れた。ダイビングのライセンスも取得した。もちろん離島割引カードもある。奄美大島に来なければ決して手に入れることのなかったカードたち、なかなか感慨深いものである。Androidユーザーからアップルユーザーになった。海や山の景色を撮るために、GoPro、ドローン、ミラーレスカメラを購入した。登山をするようになったので、mont-bell商品をはじめとするアウトドア用品が、今では家の中に溢れている。特にmont-bellのご当地Tシャツは、ものすごい勢いで増えた。そして、大きな収穫の一つとして、浮き輪なしでも海に浮かべるようになった、これは自分でも本当にすごいと思う。おそらく

奄美大島に最初に来た時の私を知っている人は、たいてい驚くだろう。一つだけ後悔があるとしたら、台風のために屋久島に行けなかったことだが、いつかりベンジしたい。楽しみが先に延びたと思っている。

こんなことばかり書いていると、遊んばかりいる、遊ぶために奄美大島に来たのではと思う人もいるだろう。半分くらいは正しい。奄美大島に来るまでは、「働くために、休む」という感覚で過ごしていたが、その後は「充実した休みを過ごすために、メリハリつけて働く」という考え方へ変わった。仕事以外の時間が増えたのは間違いない。その時間で、今後の自分の医師としてのあり方、これから的人生など将来について考えることができた。本を読んだり、セミナーに参加したりもできた。もちろん趣味も思いっきり楽しんだ。

『We only live once』、人生は一度きり。

2020年10月に奄美から八戸に戻ってすぐ、『DIE WITH ZERO』という本に出会った。まさに奄美大島に行って変わった自分の人生観がこれだと思った。今では合言葉のように使っている。

奄美大島に来て一番良かったことは、なによりもとの出会いだ。今後も関係が続いていくであろう素敵な友人たちに出会えたことが一番嬉しい。これまでの小中高/大学、初期研修時代の同期や先輩/後輩たちとの素敵な出会いもたくさんあったが、彼らとはまた違う感じがしている。奄美大島が繋いでくれた出会いだと思っている。

私の人生はここで変わった。

「アナザースカイ！奄美大島！」

次号は、鹿児島県立大島病院 平田悠哉先生のご執筆です。  
(編集委員会)